

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	“La ha fecho” o “La ha fecha” : 中世スペイン語の他動詞複合時制に於ける目的語と過去分詞の一致に関する考察
Author(s)	石岡, 精三
Citation	ニダバ , 9 : 51 - 65
Issue Date	1980-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046322
Right	
Relation	



“ La ha fecho ” o “ La na fecha ”

——中世スペイン語の他動詞複合時制に於ける

目的語と過去分詞の一致に関する考察^{④1}——

石 岡 精 三

I はじめに

周知の如く古典ラテン語の完了形には、古典ギリシャ語に認められるアオリスト（不限定過去）と完了の機能が融合（Merger）し二義的価値が認められる。後者の価値、つまり完了としての機能が顕在化する形態であるHabeo＋他動詞の過去分詞が若干の動詞に於いて形成され、後に他の動詞にも拡張された。^{④2}^{④3}しかし、この形態は古典期に於いては動詞範列の内部に組み込まれず、周辺の位置を占めていたに過ぎない。一方、この形態は現代ロマンス諸語に於いては広く見られ、一つの動詞範列、つまり複合時制としての完了形となっている。この動詞範列に於いては、現代フランス語、イタリア語での若干の例を除き、他動詞の過去分詞は中性（男性）単数形に固定している。一方、中世ロマンス諸語では、他動詞の過去分詞がその目的語に性数に関して一致する用例が多く見出される。^{④4}中世スペイン語も、これと同じ状況を呈し、過去分詞が目的語に一致する例、過去分詞が中性（男性）単数形である－oで終る例がそれぞれ見られる。^{④5}例えばCantar de mio Çid 793.

： En esta heredit que uos yo he ganada では、目的語 esta heredit と他動詞 ganar の過去分詞 ganada は性数に関して一致している。一方、Libro de Alexandre 1556, C

： mager que auie preso mucha mala colpada では、prender の過去分詞 preso は、目的語である mucha mala colpada に一致せず、中性（男性）単数形となっている。上例に見られる様な過去分詞の一致、不一致と言う交替に関して如何なる要因が考えられるであろうか。本稿では、成立年代が13世紀である法律文書、Las Siete Partidas（七部法典）を中心に据え、この交替に関する諸説を検討し、若干の考察を試みる。前述の如く、他のロマンス諸語にも、本稿の対象とする交替事象に並行するものが見られる。この交替を論じた文献としては、中世フランス語の領域では Busse, J. (1882), Mercier A. (1879) などを挙げる事が出来るが、中世スペイン語に関しては筆者の調べた限り見当たらない。また本稿の主たる対象である Las Siete Partidas に見られる傾向が他のテキストにも確かめられ得るかどうかが調査する目的で、他の韻文、散文テキストも参考とする。以下に本稿で用い、あるいは参考としたテキストと、その略号、韻文の場合、その作詩法について簡単に述べる。尚、成立年代に関しては、Pidal, R. M. (1971) を参照した。

12世紀

Cantar de mio Çid (Cid) (韻文)

13世紀

Milagros de Nuestra Señora (Mlg.) (韻文)

Vida de Santo Domingo de Silos (Sil.) (韻文)

Vida de San Millán de la Cogolla (Mil.) (韻文)

Libro de Alexandre (Alex.) (韻文)

Libro de Apolonio (Ap.) (韻文)

Poema de Fernán Gonçález (Fern.) (韻文)

Galila e Dimna (Cal.) (散文)

Fuero Juzgo (FJ.) (散文)

Las siete partidas (Part.) (散文)

La Primera Crónica General (PCG.) (散文)

14世紀

Don Juan Manuel: Libro de Conde Lucanor (Luc.) (散文)

Arcipreste de Hita: Libro de Buen Amor (Amor.) (韻文)

15世紀

Arcipreste de Talavera: Vidas de San Ildefonso y San Isidro (Talav.) (散文)

作詩法はCidとMlg. Sil. Mil. Alex. Ap. Fern. Amor.のそれとに大別される。前者は中世フランスの叙事詩のそれと類似し各行は句切れ (Cesura)により前半句と後半句とに分かたれる。各半句の音節数は一定せず数的に6-7. 6-8. 7-7. 7-8の組み合わせが最も多い。韻は脚韻で行末が類音 (Asonancia)で終る。後者は何れも教養派俗語文芸 (Mester de clerecía)のジャンルに属し同じ作詩法 Cuaderna Vía (14音節単韻4行詩)に依って構成されている。各行は殆んどが7-7の半句から成る14音節であり行末は単韻 (Consonancia)で終り同じ単韻が4行で一連を形成する。

II 本 論

(1) 有効例について

ここでは本稿で採用した用例の有効性について述べる。本稿は助動詞 Haber の場合での目的語と過去分詞との一致に関するものである。当然目的語が文法的中性要素 (lo, algo, quanto, etc.) 男性単数である時は有効例とならない。また目的語が2つ以上で接続詞により結ばれている場合も正確を期す為除外される。但しPCG.では形容詞、過去分詞が距離的に近い名詞に一致する傾向が明瞭であるので採用する(4例)。また目的語がすべて女性名詞(単複)、男性名詞複数あるいはこの組み合わせである時は有効である。更に形態論的には複合時制と同じであるがその価値が異なるもの

がある。

Ap. 233d: otorgada la ayas sin nulla condicion

上例では otorgar の動作主は ayas の主語でない。現代語ならば ayas ではなく tengas を用いる例である。この Tener + 過去分詞の表現は Beardsley, W. A. (1966 p. 46) が Emphatic perfect と呼んでいる様に複合時制に非常に近接した表現形式で、事実アストウリア方言、現代ポルトガル語では複合時制の助動詞が Haber ではなく Tener, Ter となっている。(Seifert, E. 1930, p. 383)

また本稿では有効例として頻度は極めて低い直接再帰動詞(助動詞が Haber の場合のみ)も採用する。例えば

PCG.755b47-50: Otra vez acaescio que los moros de las galeas se echaron en celada en ese logar mismo o se los cristianos, commo dicho es, auien echado.

(2) 全体の一致状況

以下に本稿で採用し、また参考とした用例の一致状況を表にして示す。(表 I)

(表 I) ^⑥

韻文	Cid.	Ap.	Alex.	Mlg.	Sil.	Mil.	Fern.	Amor.
一致⊕	61	46	159	36	25	20	35	12
不一致⊖	12	5	34	5	5	5	8	12
計	73	51	193	41	30	25	43	24
一致率	84 %	90 %	82 %	88 %	83 %	80 %	81 %	50 %
散文	FJ.	Cal.	Part.	PCG.	Luc.	Talav.		
一致⊕	16	9	532	527	9	1		
不一致⊖	3	68	483	132	43	49		
計	19	77	1015	659	52	50		
一致率	84 %	12 %	52 %	80 %	17 %	2 %		

成立年代が13世紀である韻文では何れも一致率が80%以上であるが一方散文ではかなりの変動が見られる。FJ. の写本は14世紀、Cal. は15世紀、Part. は14世紀のものであるが Cal. は後の時代の一致率を呈している。15世紀の写本である Fern. では81%とかなり高くなっている。Amor. の一致率が示す様に韻文で一致する傾向が時代的に見ても強いと考えられよう。同じく14世紀の写本である Part. PCG. の一致率からすれば散文ではジャンルの違いによっても一致状況に変動があると言えよう。また散文でも韻文でも時代が下るにつれて一致傾向が低下する。16世紀にはごく稀に一致例が見られるだけとなり (Lapesa, R. 1968, p. 256), 現代イタリア語、フランス語において一致する傾向が若干残っているのに対し、現代スペイン語ではルーマニア語と同様に一致が皆無となっている。

(3) 一致に関する諸見解

前述の如く目的語と過去分詞との一致不一致に関する論文が見当たらない以上、一般の歴史文法書等よりその見解を求めざるを得ない。Marden, C. C. (1922, p. 18-19), Zauner, A. (1921, p. 110), Lapesa, R. (1968, p. 151-152) では複合時制での過去分詞の一致傾向が強いと述べ若干の不一致例を挙げてはいるが、これら一致した場合とそうでない場合の表現上、意味上の差異の有無に関する言及は見られない。これに対し Pidal, R. M. (1964, p. 360) では目的語と過去分詞は一致しても、しなくても良く任意であると述べている。

Gili Gaya, S. (1973, p. 159, p. 116) では歴史的に複合時制について述べ、この複合形が元来過去の動作の現在に於ける結果を表現し、Haber の助動詞的性格が固定し、分詞が単数中性形に固定化するにつれて、この迂言法が現在と何らかの関係がある過去時制に変化したと述べ、一方ではこれと逆の論理で、時制としての用法が優勢になるにつれて分詞が単数中性形に固定したとする。確かに歴史的に、この所謂複合構文が結果相 (Resultativo) から完了相 (Perfectivo) へと変化したと言えようが、彼 Gili Gaya, S. の言はこの変化過程の説明とは言えないであろう。何れにしても過去分詞の不変化と時制化とは並行するものであると説いている。つまり過去分詞が中性であれば、この構文はより完了的であり、目的語と一致する場合は、より結果的で Haber 本来の所有の意味を保存しているとしている。次に Molho, M. (1975, p. 156-160) ではどうであろうか。先ず歴史的に見て過去分詞は15世紀の終り頃より不一致つまり中性形になったと述べ、一方中世スペイン語では他動詞複合時制の過去分詞は目的語が名詞であれ代名詞であれ、また文中の位置、つまり動詞(ここでは過去分詞)の前であれ後であれ性数に関しこれと一致でき、しかし一致は義務的ではなかったとする。(p. 157)

次に助動詞 Haber のアスペクト生成の相違に注目し、つまり助動詞化の程度 (Molho, M. の用語では Subduccion の相違) により Haber (I) と Haber (II) を設定する。Haber (I) ではある動作の完了だけでなく、その動作によって生じた結果をも表現し過去分詞は目的語に一致する。Haber (II) では動詞本来の他動性が失われ自動詞的となりその結果、過去分詞は中性単数となる。(p. 159-160)

以上の諸説をまとめると一致説、自由変異説、機能分担説になる。自由変異説^⑦では分詞の目的語に対する一致は任意で、一致不一致の支配する規則がないとする。機能分担説では過去分詞の一致不一致が当該複合形の機能を二分すると考える。一致する場合はある動作の完了とその結果を、不一致の場合、完了を表わすとする。一致する場合の Haber は不一致の場合の Haber に比して助動詞化が進んでおらず、Haber 本来の意義を完全には失っていないと考える。この二種の Haber に関しては後述する。

(4) 韻律的要因

Cid. Ap. Alex 等は韻文であるので、ここでは韻律的要因を考慮に入れ、この要因が一致に関して影響があるか否か調べる。過去分詞が行末の類音、単韻に位置した場合とそうでない場合、また連の初行末に位置した場合とそうでない場合について調べたが、それぞれの要因でテキストが二つの相反

する傾向を示す集団に分かれた。^{⑩8}以上の如く、それぞれの要因による分布が等質でないのでこれらの要因は一致不一致に参与するとは言えないと結論して良からう。

次に目的語と過去分詞が同じ半句内にあるか否かが問題となろう。両者が同じ半句内にある時とそうでない時とではその緊密度 (Solidalidad) が異なると予想される。^{⑩9}

何れの韻文テキストでも同半句の場合一致率が増加し、異半句では減少する傾向が見られる。ここでは各テキストが概ね等質な分布を呈しているので韻文全体の総計分布を考えても無意味ではないと思われる。

(表Ⅱ) 韻文全体^{⑩10}

	⊕	⊖	計	一致率
同半句	264(245)	28(47)	292	90%
異半句	118(137)	46(27)	164	72%
計	382	74	456	84%

この場合 99.9% 以上の信頼率 (確率)^{⑩11}で、この分布が有意であるという結果となる。

以上韻律的要因で、全韻文テキストに亘った傾向としては同半句、異半句の要因が考えられ、韻文全体で目的語と過去分詞が同半句内にある時は一致、異半句内では不一致の傾向が見られるが、それはその総体平均一致率84%を規準にすれば十分意味があるという事である。

(5) 統辞論的要因

現代スペイン語では若干の例外^{⑩12}を除いて助動詞 Haber と過去分詞は分離不可能で助動詞+過去分詞で一つの動詞範列を形成する。一方中世スペイン語では

Cid. 2454 : De XX arriba ha moros matado

の如く分詞と助動詞の間に目的語が位置した

1) Fern. 198a : Avya aquestas nuevas el conde ya oydo

Fern. 42b : como ovo por las paryas a Marruecos troçido

の如く副詞 ya, 前置詞句が位置する事も多く、語順はかなり自由である。この傾向は予想されるように韻文で著しい。そこで助動詞と過去分詞の間に何も要素がなく直接接続している場合と、それ以外とに分類して調べたが全テキストに亘った傾向は見られなかった。また助動詞の「時」、目的語の性数によって調べたが、有意な分布は見られなかった。

(a) 目的語の種類による分布

ここでは目的語の種類、つまり目的語が名詞、関係代名詞、人称代名詞等である時の一致率に注目すべき分布が見られるかどうか調べる。目的語が関係代名詞その他である場合、特に注目すべき分布は見られない。しかし目的語が名詞、人称代名詞である場合興味ある分布となる。

(表Ⅲ-1) Part^⑬

	⊕	⊖	計	一致率
名詞	98(173)	228(158)	326	30%
人称代名詞	222(147)	52(133)	274	81%
その他	211(212)	203(192)	414	51%
計	531	483	1014	52%

上表からも、Part では目的語が名詞の場合不一致、人称代名詞の場合一致傾向を見てとれよう。検定によってもこの目的語要因を設定し得る。PCGでもPartと同様の分布が見られるが、韻文テキストではPartと類似の分布を呈するAlex以外については頻度が低い為、何とも言えない。

(b) 複合形がいかなる節にあるか。

更に当該複合形がいかなる節にある時、一致する傾向を呈するであろうか。^⑭時の副詞節にある時特異な分布となる。

(表Ⅲ-2) Part

	時の副詞節	その他	計
⊕	116(99)	407(424)	523
⊖	72(89)	397(380)	469
計	188	804	992
一致率	62%	51%	53%

(表Ⅲ-3) PCG

	時の副詞節	その他	計
⊕	214(202)	313(325)	527
⊖	38(50)	94(82)	132
計	252	407	659
一致率	85%	77%	80%

一方韻文テキスト全体に亘っても上と同じ傾向が見られるが検定は不能である。そこで各テキストの分布が等質であるので、韻文全体で一致状況を吟味しても無意味とはなるまい。以下にその分布を挙げる。

(表Ⅲ-4)に関して検定すると95%の信頼率で有意となる。(表Ⅲ-2)(表Ⅲ-3)についても同様に有意となる。

以上で散文、韻文双方に於いて時の副詞節の場合、つまり接続詞 *quando, despues que* (*desque, des que, de que*), *luego que, fasta que, ante que* (*antes que, enante que*), *adiesso que, abes*で導入される節で一致する傾向がある結果となる。これに関しては後述する。

(表Ⅲ-4) 韻文全体

	時の副詞節	その他	計
⊕	69(60)	313(322)	382
⊖	7(12)	67(62)	74
計	76	380	456
一致率	91%	82%	84%

(c) 語順による分布

前記の如く現代スペイン語、ルーマニア語での他動詞複合形では、目的語と過去分詞との一致は見られないが、一方現代フランス語、イタリア語では若干の場合、特に目的語が分詞に先行する場合一致する傾向がある。それでは中世スペイン語でもこの語順によって一致状況に変化が見られるだろうか。三つの要素、過去分詞(P)、目的語(O)、助動詞Haber(A)の順列として六通りの語順が見られるが、全体的に見ると助動詞(A)の位置は大きな要因となっておらず、むしろ目的語(O)と分詞(P)との相対的位置により特異な分布が観察される。^{④15}

(表Ⅲ-5) Part

	⊕	⊖	計	一致率
O~P	460(375)	253(341)	713	65%
P~O	71(156)	230(142)	301	23%
計	531	488	1014	52%

(表Ⅲ-6) PCG

	⊕	⊖	計	一致率
O~P	322(307)	63(78)	385	84%
P~O	200(215)	69(54)	269	74%
計	522	132	654	80%

Part. では明らかにO~Pで一致、P~Oで不一致の傾向が見える。検定を行っても99.9%の信頼率で有意となる。またO~Pのみの検定では、全体平均一致率52%に比しては99.9%、50%に比しては99%の信頼率で有意、P~Oに関しては、全体一致率52%、50%に比しても99.9%の信頼率で有意となる。PCGでも同様の傾向が見える。また韻文でもCid.を除き同じ傾向であるが、Alex.を除き検定が不能なので、ここではAlex.の分布とCid.を除く韻文全体のそれを挙げる。

(表Ⅲ-7) Cid.以外の韻文全体

	⊕	⊖	計	一致率
O~P	274(259)	35(50)	309	89%
P~O	40(55)	26(11)	66	61%
計	314	61	375	84%

(表Ⅲ-8) Alex.

	⊕	⊖	計	一致率
O~P	135(124)	17(28)	152	89%
P~O	18(29)	17(6)	35	51%
計	153	34	187	82%

(表Ⅲ-7)では全体で99.9%の信頼率で、O~Pに関しては全体一致率84%に比して98%、50%に比して99.9%、P~Oに関しては全体一致率に比して99.9%の信頼率で有意となる。

(6) 以上の要因の検討

(a) 目的語の種類と語順要因について

目的語の種類に依る要因で見た様に、Part. ではこの要因が強かった。目的語が名詞の場合一致率が30%、人称代名詞で81%となった。そこでこの目的語要因と語順要因とを組み合わせるといかなる分布を呈するだろうか。以下に大きくO~PとP~Oとに分け、更にそれぞれを目的語が名詞、人称代名詞、その他に分類して見る。

(表IV-1) Part

	O ~ P			P ~ O			計
	名詞	人 代 名 詞	その他	名詞	人 代 名 詞	その他	
⊕	29(20)	222(143)	209	69(150)	0	2	531
⊖	10(19)	50(129)	193	218(137)	2	10	483
計	39	272	402	287	2	12	1014
一致率	74%	82%	52%	24%			52%

(表III-1)では目的語が名詞の場合一致率が30%となったが上表ではO~Pの名詞で74%, P~Oで24%となっている。また目的語が人称代名詞ではP~Oでの用例が少ないが, O~Pでの一致率が若干なりとも(表III-1)のそれよりも増加している。つまり, 目的語が名詞, 人称代名詞である事によって一致率が増加, 減少するのではなく, 語順要因O~P, P~Oがより強く作用していると言えよう。

(b) 語順と時の副詞節要因

前述の如く韻文, 散文双方に於いて当該複合形が時を表す副詞節にある時一致する傾向があった。それでは, この要因と目的語, 過去分詞の語順要因を組み合わせると, どのような分布になるだろうか。

(表IV-2) 時の副詞節でのPart.

	O~P	P~O	計
⊕	86(63)	30(53)	116
⊖	16(39)	56(33)	72
計	102	86	188
一致率	84%	35%	62%

仮りに時の副詞節である要因がO~P, P~Oの語順要因よりも強いものであれば, 語順に拘わらず時の副詞節での平均一致率62%に近い分布を示す事になろう。ところが(表IV-2)で見える様に, O~Pで一致, P~Oで不一致傾向である。この傾向は韻文テキスト全体, PCG.

にも見られる。Part. に関し検定を行なうと99.9%の信頼率で有意となる。結果として, 時の副詞節である故に一致傾向があるとは言えず, 語順要因が前者の要因に影響, つまり語順要因がより強く作用している事になろう。^{④16}

(7) 意味論的要因

(a) 助動詞Haberの本来的意義

機能分担説によれば助動詞Haberには二種あり, 目的語と性数に関して一致するHaber (I)と不一致であるHaber (II)が想定される。両者の違いは助動詞化の程度に帰因するものであった。Haber (I)はそれ本来の意義を完全には失なっておらず, またそれに並行して分詞は動詞の性格よりも受動分詞, つまり形容詞としての性格が強く, その結果分詞が目的語と一致するのであった。

そこでHaber本来の意義「得る」, 「持っている」, 「持つ」等と動詞の意義特徴の関係を考える。動詞(ここでは過去分詞)の意義特徴として, 目的語の指示対象(Referent)が絶対的, 相対的, 具体的, 抽象的を問わず, 主語(Haberの主語)に向かって来るか, それとも主語から他所に向かって行くかと言う〔±Venir〕を設定する。例えば, 「受け取る」(Recebir)は典型的に〔+Venir〕であり, 「失なう」(Perder)は〔-Venir〕となる。〔+Venir〕として他に *ayuntar, taner, coger, prender, ganar, comprar, cenir, furtar, tener, robar, heredar, tomar. haber, levar*〔-Venir〕として *entregar, pagar, logar, enagenar, empenar, vender, mandar, dar, prestar, despender, arrendar, dexar, emprestar, poner, desechar* を選ぶ。以下にその分布を示す。

(表V-1) Part.

	〔+Venir〕	〔-Venir〕	計
⊕	127(136)	114(105)	241
⊖	129(120)	85(94)	214
計	256	199	455
一致率	50%	57%	53%

Part. では〔+Venir〕で一致率50%, 〔-Venir〕で57%と若干〔-Venir〕で一致傾向を見せている。仮りにHaber (I) が本来の意義を失っていないならば〔+Venir〕の動詞と結合して高い一致率になるであろう。〔+Venir〕同様, 〔-Venir〕でも仮定と反対の分布が見

られる。一方, 韻文, PCG では, 〔-Venir〕に比して〔+Venir〕で一致傾向が見えるが, これらの分布はほとんど意味をなさない。韻文全体に関して検定を行っても信頼率を30%まで下げなければ有意とは言えない。以上の結果, Haber (I) と動詞の意義特徴〔+Venir〕とは意味論的により結合しやすいと予想されるにもかかわらず, 両者の間には特に強い親和性が認められない事となる。

(b) 結果目的語 (Ergebnisobjekt) について

- ① He wrote a letter.
- ② He broke his house.
- ③ He bought a camera yesterday.

上例でのそれぞれの目的語は, その動詞との論理関係を異にする。①では彼が何か文章を書き上げて初めて手紙を書いた事になる。つまり目的語 (a letter) は「書く」(write)の動作の結果を先取りしている所謂結果目的語となっている。②③では目的語が単に動作の対象となっている。^{⑫17}

例えばPart. では,

Part. I. IV. XCIV: Perdonando los perlados á los que han fechos yerros por que merescan perdon...

Part. III. XVIII. LX: ... como si la (sc. la carta) hobiese escrita el escribano primero, ...

Part. VII. I. XX: Acusando un home á otro diciendo que habie falsada la moneda del rey...

等の如く目的語に結果目的語をとるものが多くある。以下にその分布を挙げる。

(表V-2) Part. ⑩¹⁸

	結果目的語	非結果目的語	計
⊕	121	381	502
⊖	142	314	456
計	263	695	958
一致率	46 %	55 %	52 %

結果に指向する結果目的語の場合一致率が低下する。つまり一致した場合と結果目的語とは並行するものではない事になろう。

(c) facer について

動詞それぞれの一致状況を調べなければならないであろうが頻度が十分に高いものは極少数なのでここでは facer をとり上げる。

Part. I. VII. III. : ... fueras ende si hobiese fecho profesion en la manera que dice en la ley ante desta, ...

Part. II. XIII. XIX. : ... et á endereszan tuertos si los hobiese fecho...

Part. II. XXVI. XIX. : ..., et si postura non hobiesen fecho, ...

Part. I. V. XLII. : ó come fagan penitencia de las pecados desque los hobieren fechos, ...

など、Part. では 250 例あるが、一致例が 107, 不一致例が 143 となっている。Part. の全体一致率 52% に対し、facer の一致率が 43% と若干不一致の傾向を呈する。機能分担説に従えば動詞 facer は複合時制で動作の完了とその結果よりはむしろ動作の完了のみを表現する傾向を持つ事になろう。しかしながら、前述の如く facer は典型的に結果目的語を多くとり、つまり、より結果に指向する動詞であった。それでは脈絡が殆んど同じ場合の一致、不一致例を引用してみよう。

Part. II. XXVI. X. : ... porque de estos atales es su oficio muy peligroso que los han de matar si lo non ficieren como conviene, por ende deben ante seer pagados que la particion se faga, et sin aquello que les deben dar segunt la postura que con ellos hobiesen fecha, ha de seer suyo todo lo que les veniere á mano en quanto estudieren haciendo su oficio.

Part. II. XXVI. XXX. : Partir deben entre sí los que fueren en flota ó en armada ó en otra sobre mar para guerrear los enemigos aquello que les cayere en su quíñon de la ganancia

que ficieren, dando primeramente al rey sus derechos que debe haber por razon de señorio et de mayoria, asi como dice en la ley ante desta. Otrosi deben dar al almirante despues desto el septimo, porque es cabdiello mayor dellos so el rey: et la otra merced que les ficieren los señores que haya cada uno su parte segunt la postura que hobiesen fecho con ellos ante que entrasen en el almada.

何れの例でも戦利品の分配について記述していて、それぞれ物見の者、艦隊乗組員の場合どのようなせよと規定し、何れの場合でも互いに為した協約に従って〔segunt la postura que hobiesen fecho (fecha) con ellos〕分配しなければならないとしている。明らかにこの文脈では *facere* の動作の完了のみでなく、その結果としての協約 (*postura*) が想起 (表現) されている。更に、PCG から同じ文脈での一致例不一致例を引用しておく、

PCG. 616a28-35

: Otro dia de manana, desque el rey ouo oydo la missa, fuesse pora los palacios de Galiana do estaua la corte apareiada de fazerse, et entrando el rey por las casas de pie, ca descendiera de su bestia, yuan çerca el condes et ricos omnes et todos los omnes onrrados que y eran, saluo el Çid que non viniera avn de su posada.

PCG. 60a2-5

: Et desque todas estas razones ouo oydas acuel almozarif del Çid, touo que era aquel mandadero del soldan omne entendudo et sabio,...

PCG. 693a46-49

: Desque los sus naturales ouo el rey don Alfonso puesto en recabdo desta guisa, apartosse otro dia con los de Aragon et...

PCG. 693b53-56

: Et el rey don Alfonso, el muy noble, desque ouo todas estas cosas puestas et paradas con todas estas yentes, de la guisa que auemos contado, mando a sus notarios...

以上で見た様に、一致と動作の完了更にその結果、不一致と動作の完了は一対一に対応するとは思われない。

Ⅲ 結 語

ここまで種々の要因を設定し、その分布を調べた。12、13世紀の韻文テキストで何れも一致率が80%以上である事から一般に目的語と過去分詞が一致すると言えるかも知れないが、一方散文テキストではそれぞれの一致率が52%と50%に近接している。またPart. PCG.は共に、Alfonso Xが編纂を命じたものでありながら、^{④20}その一致状況が極めて異なる事に留意するならば、一致説の妥当性が問題となろう。自由変異説に依れば、理論的には一致率が50%近くになるものであり、その点ではPart.の分布がそれに最も近接すると言えるが、一方Part.では目的語と過去分詞との語順要因が作用し、特に、P～Oで一致率が28%まで減少し、不一致傾向が見られた。PCGと他の韻文テキストでも、それぞれの全体一致率が50%よりも高いが、この語順要因が作用していると言う結果が検定で得られた。とすれば、自由変異説も問題となろう。更に機能分担説も意味論的要因で見た様に問題となる。

自動詞複合時制での助動詞 Ser と Haber の交替も他動詞複合時制同様、アスペクトの相異、つまり結果相 (Resultativo) と完了相 (Perfectivo) とで説明される。これに対し、フランス語の領域では別の要因でこの交替を説明しようとする試みもある。^{④21}今後これらの新説を検討し、スペイン語にも適用し更に考察を進めなければなるまい。^{④22}

〔 注 〕

- ④1 本稿は筆者の修士論文(1979)「他動詞複合時制に於ける過去分詞の一致について」を要約し、補助テキストとしてPCGを加えたものである。
- ④2 若干の動詞に関してはErnout-Thomas(1972)p.223, Benveniste, E(1968)p.87を参照されたし。
- ④3 例えば, Ernout-Thomas(1972) p.223を見よ。
- ④4 他のロマンス諸語に関しては, Solà, J.(1973)p.60-80を参照されたし。
- ④5 自動詞の複合時制に関しては, Benzing, J.(1931)を参照されたし。
- ④6 一致率は小数第1位を四捨五入した。
- ④7 中世ポルトガル語に於いても, 例えばCámara, Jr. J.M.(1922)が自由変異説をとっている。
- ④8 Cid., Fern. では行末位置で一致率が減少し, 行末以外で増加。Ap. Alex. Mlg. Sil. Mil. では逆の傾向が見える。
- ④9 Cid. 803: A so castiello a los moros/dentro los an dexados, の如く a los moros を更に代名詞 los で受けている時は同半句とする。
Cid.: Con los caualleros/que el Cid le auie dados, では関係代名詞 que の先行詞は los caualleros であるが, que 自体, 性数表示の力を持っていないので異半句とする。

- ⑩ ()内は理論頻度。
- ⑪ カイ2乗検定による。
- ⑫ 副詞 *ya, nunca, bien* それと主語。
- ⑬ ⑭ 目的語が名詞で更にそれを代名詞で受けている場合は除外してある。
- ⑮ ⑯ 助動詞が現在分詞, 比較の *que* の構文は除外してある。
- ⑰ 韻律的要因で行った句切れ要因と語順要因とを組み合わせても全韻文テキストに共通する傾向は見られない。
- ⑱ ⑲ ⑲と⑳の目的語の差異において, ⑲の部類の動詞を広い意味で *Causative verb* と呼ぶ。
(Anderson, J. M. 1971)
- ㉑ Part I. XIV. IX: . . . *habiendo fecho tal cosa por que lo meresciese*
perdon. . .
の如く, *tal cosa* が単なる対象なのか結果目的語なのか判断が微妙な場合は除外する。
- ㉒ 語順 O ~ P で一致率が55%, P ~ O で44%である。
- ㉓ Part. PCG. の写本は主として14世紀のものである。
- ㉔ Nordhal, H. (1976),
Engwer, Th. (1951),
- ㉕ 更にこの過去分詞の一致不一致に関する交替が各作家によって異なった様相を呈する, つまり個人語 (Idiolect) 的である可能性も考えられよう。一般に中世前期では作者不詳の作品が多く, この点でも考察が不可能であった。今後は, この個人語的性格の有無を確かめる意味でも同一作者の諸作品の調査が必要であろう。

使用テキスト

Cantar de mio Çid

Pidal, R. M. : Obras de R. Menéndez Pidal tomo IV, V
Madrid 1969

El Libro de Alexandre

Raymond S. Willis, JR. : Elliot Monographs 32
New York 1965

El Libro de Apolonio

Marden, C. C. : Part I, Texts and Introduction Elliot Monographs 6
New York 1965

Poema de Fernán González

Alonso, Z. V. : Clásicos Castellanos 128 Madrid 1970

Milagros de Nustra Señora

Antonio G. Solalinde : Clásicos Castellanos 44

Madrid 1972

Vida de Santo Domingo de Silos

Vida de San Millán de la Cogolla

Amancio Bolaño e Isla : Sepan Cuantos 35

México 1973

Fuero Juzgo

Real Academia Española,

Madrid 1971

Las Siete Partidas

Real Academia De La Historia,

Madrid 1972

Primera Crónica General II

Pidal, R.M.

Madrid 1955

Libro de Conde Lucanor

José Manuel Blecua : Clásicos Castalia 9

Madrid 1971

Libro de Buen Amor

Jacques Joset : Clásicos Castellanos 14,17

Madrid 1974

Vidas de San Ildefonso y San Isidro

José Madoz y Molerés, S. I. : Clásicos Castellanos 134

Madrid 1962

Calila e Dimna : Real Academia Española

Madrid 1915

参 考 文 献

Anderson, J.M. (1971) : The Grammar of Case

Cambridge 1971

Beardsley, W.A. (1966) : Infinitive Constructions in Old Spanish

New York 1966

Benveniste, E. (1968) : Mutations of Linguistic Categories.

W.P. Lehmann and Yakov Malkiel : Directions for Historical Linguistics.

Austin & London 1968 p.83-94

- Benzing, J. (1931) : Zur Geschichte von "Ser" als Hilfszeitwort bei den intransitiven Verben in Spanischen
Zeitschrift für Romanische Philologie LI p.385-465
- Busse, J. (1882) : Die Congruenz des Participii praeteriti in activer Verbalconstruction im Altfranzösischen bis zum Anfang des XIII Jahrhunderts.
Göttingen 1882
- Cámara, Jr. J.M.(1972) : The Portuguese Language. Translated by Anthony J.Nara
Chicago & London 1972
- Engwer, Th. (1951) : "Avoir" und "Etre" als Hilfsverben bei Intransitiven.
Romanische Forschungen 63, p.79-94
- Ernout-Thomas (1972)
Alfred Ernout & François Thomas : Syntaxe Latine, Paris 1972
- Gili Gaya, S (1973) : Curso Superior de Sintaxis Española
Barcelona 1972
- Lapesa, R. (1968) : Historia de la lengua española
Madrid 1968
- Marden, C. C. (1922) : Libro de Apolonio, Part II. Grammar, Notes and Vocabulary,
New York 1922
- Mercier, A. (1879) : Histoire des participes français
Paris 1879
- Molho, M. (1975) : Sistemática del Verbo Español tomo I
Madrid 1975
- Nordhal, H. (1976) : "Assez avez alé" et "avoir" comme auxiliaires du verbe "aller" en ancien français.
Revue Romane 12 1976 p.54-66
- Pidal, R. M. (1964) : Obras de R. Menéndez Pidal tomo V
Madrid 1964
- Seifert, E. (1930) : "Haber" y "Tener" como expresiones de la posesión en español.
Revista de Filología Española XVII 1930 p.345-389
- Solà, J. (1973) : Estudis De Sintaxi Catalana tomo II
Barcelona 1973
- Zauner, A (1921) : Altspanisches Elementarbuch
Heidelberg 1921